

〈研究ノート〉

南九州・沖縄の海士の現況と類型

——聞き取りを中心に——

小 田 耕 三

はじめに

アマ（海士・海女）とは、潜水して水棲生物を採捕する漁民の呼び名であり、男女ともに日本列島各地に存在する。海外では韓国の済州島の海女が有名であるが、中国の舟山群島（チョウサン）にもアマがいたという報告例⁽¹⁾もあり、またミクロネシアでも潜水漁撈は行われている。しかしながら列島規模で専門的なオトコアマ（海士）・オンナアマ（海女）ともに存在するのは、日本だけにみられる特徴と言ってよい。本研究はこれまで研究例が比較的少なかったオトコアマ（海士）の分布が顕著な南九州・沖縄のアマ漁業について、その実態と歴史的背景を把握し、さらに地域的特色を類型化し比較考察することを目的とする。以下の行論では、潜水漁業者全体を指すときはアマとするが、男女を識別する場合は、オトコアマを海士、オンナアマを海女と記す。

アマに関する先行研究は、地理学や民俗学などを中心に数多く見られる。日本国内を対象とし

表1 調査対象地と調査期間

調査時期	調査場所
2000年8月2日～10月7日	沖縄県糸満市
	沖縄県国頭郡本部町
	沖縄県島尻郡知念村
	鹿児島県大島郡瀬戸内町
2001年3月10日～3月21日	鹿児島県出水郡長島町
	鹿児島県阿久根市
2002年6月11日～6月27日	鹿児島県大島郡徳之島町
	鹿児島県大島郡和泊町
	鹿児島県大島郡与論町
2002年3月10日～3月17日	鹿児島県曾於郡志布志町
	鹿児島県肝属郡内之浦町
2002年10月27日～11月4日	沖縄県石垣市
2003年3月9日～3月15日	鹿児島県西之表市
	鹿児島県熊毛郡屋久町
2003年6月8日～6月16日	沖縄県平良市
	沖縄県宮古郡伊良部町
2003年10月19日～10月25日	鹿児島県名瀬市
2004年2月14日～2月21日	沖縄県島尻郡中里村

た地理学的研究としては、大喜多甫文の『潜水漁業と資源管理』⁽²⁾がある。同書ではアマによる潜水漁業の歴史や、アマの分布、漁獲物などの全国的実態と、三重県・千葉県・石川県・徳島県の事例が中心となっている。谷川健一の編集による『日本民俗文化資料集成』の第4巻『海女と海士』⁽³⁾には、宮本常一の「海人ものがたり」をはじめ、アマによる潜水漁業の既往の研究がまとめられている。その他に田辺悟『日本蛮人伝統の研究』⁽⁴⁾があり、それは漁具を中心として全国のアマを包括的に扱った実証的研究である。

まず、国内におけるアマの分布を俯瞰する。アマは日本各地に広く分布するが、海士・海女では地域差が見られる。1985年にアマの都道府県別・性別の分布を調査した大喜多甫文⁽⁵⁾によると、全体的な傾向としては、海士は日本列島各地に広く分布するのに対し、海女は偏在する傾向がある。中でも海士が多い地域は岩手県を除く東北地方の各県と、和歌山県・長崎県に、一方海女が多い地域は、石川県・福井県・静岡県・三重県に分布する。また両方がともに多い地域は千葉県・岩手県である。従来わが国ではアマの研究が海女を中心にしてきたこともあり、九州や南

表2 鹿児島県・沖縄県の敷網漁業の性格に関する統計（2003年）

地域	項目	漁業種類別漁撈体数（統）			漁業種類別漁獲量（t）		
		全体	その他の敷網	潜水器漁業	全体	その他の敷網	潜水器漁業
全 国		294,012	2,495	2,073	4,752,986	55,336	15,910
鹿児島県		9,689	66	168	93,673	2,409	365
沖縄県		6,210	125	595	20,142	521	1,139

漁撈体：漁業を営むための漁撈の単位。漁船非使用の場合は計上されない。
 潜水器漁業：潜水器を使用して海中に潜り、水産動植物を捕ることを目的とする漁業。
 1995年以降の水産庁の統計では、「（沖縄式）追込網」は「その他の敷網」に含まれる。
 出展：農林水産省（2003）：『平成15年漁業・養殖業生産統計年報』

全国に占める割合（％）

地域	項目	漁業種類別漁撈体数			漁業種類別漁獲量		
		全体	その他の敷網	潜水器漁業	全体	その他の敷網	潜水器漁業
全 国		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
鹿児島県		3.3	2.6	8.1	2.0	4.4	2.3
沖縄県		2.1	5.0	28.7	0.4	0.9	7.2

同一県内に占める割合（％）

地域	項目	漁業種類別漁撈体数			漁業種類別漁獲量		
		全体	その他の敷網	潜水器漁業	全体	その他の敷網	潜水器漁業
全 国		100.0	0.8	0.7	100.0	1.2	0.3
鹿児島県		100.0	0.7	1.7	100.0	2.6	0.4
沖縄県		100.0	2.0	9.6	100.0	2.6	5.7

漁撈体あたりの漁獲量（t）

地域	項目	漁業種類		
		全体	その他の敷網	潜水器漁業
全 国		16.2	22.2	7.7
鹿児島県		9.7	36.5	2.2
沖縄県		3.2	4.2	1.9

西諸島の海士研究は手薄であったことは否めない。

南九州・沖縄におけるアマ漁業の漁法には、2つの系統がある。沖縄式追込み網漁と潜り漁である。第1章で追込み網漁を、第2章で潜り漁を取り上げて詳述し、結論部で追込み網漁と潜り漁の分布とその変化について論じる。その統計値を表2に示す。追込み網は「その他の敷網」⁽⁶⁾に、潜り漁は「潜水器漁業」に分類される。

調査対象地域と調査期間は表1に示す。各々の地域に1~2週間ずつ滞在して、漁協や市役所水産課等で情報・資料収集を行った後、漁家から直接聞き取りを行った。なお、追込み網漁に関しては奄美大島龍郷町円地区と沖縄県伊是名村内花で参与観察を行った。

第1章 追込み網漁

(1) 追込み網漁とは

追込み網漁は沖縄県糸満で発祥し、他地域への拡大していった集団漁法である。糸満漁民は追込み網漁を編み出し、各地で勇壮な「海の狩人」⁽⁷⁾とも呼べる追込み網漁に従事し広めてきた。奄美諸島や沖縄各地の漁村には、糸満出身の漁業者によって拓かれた例も多い。また糸満出身者は県内にとどまらず、南はインドネシア、北は佐渡島まで広い行動範囲をもち、移動と定住を繰り返してきた海洋的性格をもった漁民である。

追込み網漁とは、各自が威し具を持って上下に揺らしたり、あるいは網のところどころに白く光るアダンの芯芽やビニールテープを挟み込み、その網を遠巻きにして魚を威嚇しすることによって袋網に追込むという漁法である。魚を威かさなければ、魚は通って来た浅瀬の方へ引き返したり、網を迂回したりして逃げてしまう。海面を叩いたり、また船べりを叩いたりして、魚を追込む人が10名は必要だった。

沖縄で追込み網漁が発展するには幾つかの要因がある。そのため、水中メガネ（沖縄ではミーカガンと呼ばれる）が発明されたことや、網が麻糸から綿糸に変わったことがあげられる。また、貧困な農山村からヤトイングワ⁽⁸⁾として子供たちが雇われたという背景もある。

有名な追込み網漁には、アギヤー、チナカキヤー、パンタタカーなど多くの種類がある。沖縄本島の糸満のアギヤーはサンゴ礁の溝の入り口から魚を追い上げる漁法である。その「あげる」という行為からアギヤーと呼ぶようになったという。宜野座村一帯ではクチアギという呼称も使われている⁽⁹⁾。

最も大型の追込み網漁がアギヤーで、30~40人という大人数で行い、何十尋^{ひろ}もある深い場所で行う。これはマワシタカアミ（廻高網）ともいい、明治中期頃に始まった。丸木舟であるサバニは6艘から10艘であり、それぞれの舟にトモヌイという船頭がいる。網を張ると、男たちが一斉に海の中へ飛び込み、10m間隔で半円状に並び、魚群を袋網の方へ追う。この時各自、スルシカーと呼ぶ網の威し具を手を持っているが、このスルシカーの先には石（現在は主にチェーンが用いられる）が括りつけてあり、海底を叩いて音で威す。また、この網には白く光るアダンの芯芽がところどころに挟んであり、海中で異様に揺れて魚を威すことになる。

パンタタカーというのは岸辺を利用して少人数で行うもので、第一線を退いた老漁夫と子供たちの漁であるが、子供たちが漁夫となる養成機関の役割も果していた。チナカキヤーは、パンタタカーと同じ仕掛けだが、外海（ソト）で行い、威し具として綱（チナ）を使うものである。

各々の追込み網漁にはかなり規模の差異がある。例えば、スズメダイ＝アギヤーはグルクン＝アギヤーの規模を小さくしたもので、人数も7～8人で網の数も少なく、追込む距離も短い。

(2) 追込み網漁の類型と技術段階

追込み網漁が現在も行われているところは、筆者が調査地域を北から順に鹿児島県の甑島・奄美大島（龍郷町・瀬戸内町）・与論島・沖永良部島、沖縄県の伊平屋島・伊是名島・宮古島・石垣島である。つい最近まで行われていたところは鹿児島県奄美大島（笠利町）、沖縄県久米島である。かなり以前に廃れたところに、鹿児島県種子島・屋久島・奄美大島（名瀬市）・喜界島がある。これを操業期間と導入の相対的な新旧で、表3のように4類型に分けてみた。

表3 現在の追込み網漁の類型

新旧 \ 時期	季節的に行う	年間を通じて行う
導入が相対的に古い	I：与論島 沖永良部島 奄美大島（龍郷町）	II：奄美大島（瀬戸内町） 宮古諸島 石垣島
導入が相対的に新しい	III：伊平屋島 伊是名島 甑島	

なぜ南西諸島に追込み網漁が発展したのか。サンゴ礁の海底に棲息する魚はサンゴがつくる微地形どおりに移動し、礁穴に逃げ込まない習性を利用している。追込みといっても、南西諸島の礁域では威しだけで網にかかりやすい。その点で、サンゴ礁が存在しない本土の甑島の追込み網漁とは異質である。その他ヤトイングワという補助的な人手があったことや、カツオの餌取りという需要があったことなど社会経済的要因が背景にある。

あえて技術段階を区別するならば、少人数で年間を通してボンベを背負って行う漁業フロンティア地域である宮古列島・石垣島が技術レベルでは最上位にくる。そして以前の追込み網漁地域である種子島・屋久島はそれより低位にある。だからこそ、種子島・屋久島では廃れたといえることができる。

表3に示されているように奄美諸島では、追込み網漁は古くから盛んで昭和初期に全盛期を迎える。また宮古列島や石垣島でも古くから追込み網漁が行われていたことは確かだが、現在のよう近代化された追込み網漁が盛んであるのはこの地区だけであろう。

(3) 類型Iの地域

糸満漁民が早くに入りこんで、追込み漁の導入は相対的に古い、現在は衰退し、季節的操業に限定されている地域である。

与論島 与論へ糸満漁民が出漁を開始した時代は明治半ばまで遡れる。そして与論へ糸満の追

込み網漁が伝わったのは大正時代である。また、与論島における大正時代の追込み網漁の組は8統あり、20~40人前後の人員で行う大規模なものであった。漁協長のT. S.氏によると、与論では昭和に入ってから糸満漁民から習った追込み網漁を自営する者が出てきたという⁽¹⁰⁾。昭和初期、与論で追込み網漁を行う組は数組が存在していた。

与論の戦前の追込み網漁は、追込みといっても人手が少ない場合も多かったので、足りない潜水手の代わりに、ロープを20m下げて囲ってそこに追込むという方法がとられていた。屋久島のトビウオロープ曳き漁と似ている。

戦後、米軍の統治下にあった与論は本土の出稼ぎもままならず、沖永良部島・徳之島を廻って、追込み網漁をしていた。また沖縄へ行って漁法を学びそれを地元を広めることもあった。現況としては漁法も多少変わり、従事者も大幅に少なくなった。2~3月頃、他の漁をする人が、一定の期間この漁に参入しているが、現在の年間の稼働日数は40日程度である。つまり、与論の追込み網漁の起源は相対的に古いが、現在は1統のみが現存し、季節的な操業となっているため、類型Iに帰属させることができよう。

沖永良部島 沖永良部島では、現在、漁協青年部の部員6~7名で追込み網漁を操業しているが、与論島と同様に糸満漁業の名残とみることができる。

(4) 類型IIの地域

導入が相対的に古く、原則、通年操業を行う類型である。

奄美大島 大正時代から昭和初期にかけて奄美大島の古仁屋に来ていた追込み網組は4統あったが、そのうち、糸満からの出漁が3組、与論島からの出漁が1組であった。奄美大島に追込み網漁が伝わったのは、大正初年(1912)~昭和8年(1933)であり、奄美大島でカツオ漁が勃興したのと同じ時期であった。つまり北からカツオ漁業が伝播し、南から追込み網漁業が伝播して二つの商業的漁業が形成されていた⁽¹¹⁾。前者は島外向け(移出目的)であって、後者は島内消費を目的とした点でそれとは異質であった。『瀬戸内町誌(民俗編)』によると、1913年の西久組が追込み網漁の網組の最初であるとする。沖縄から若者が集団就職のような形で大島へ出稼ぎに来たのが大島における追込み網漁の始まりであり、戦争中も細々と続いていた。奄美大島に追込み網漁が伝播した大きな条件の一つとしては、大島では、農業への依存度が高く、伝統的な漁民というのが存在しなくて、糸満漁民が定着するのに、好都合だったからである。つまり、漁業権の設定がなく漁業の空白地帯であったことによる⁽¹²⁾。

奄美地方では、戦後間もない頃、追込み網漁の網組は12統(古仁屋6統、名瀬3統、龍郷町1統、喜界島2統)が存在していたけれども、現在、名瀬と喜界島のものはすべて消滅しているのに対して、古仁屋のものは2統が残存している。また笠利町のもは、1980年頃に2統の網組が組織されたが現在は消滅している。瀬戸内町には、上原組と池田組という網組があり、そのうち上原組には糸満出身者とその子孫が多い。もう一方の池田組は1980年頃までは20名程度で漁を行っていたが、現在は7~8名で漁を行っている。現在のメンバーは血縁関係者を中心に構成されている。組主の叔父や義理の兄が加計呂麻島の秋徳の追込み網漁の漁業者から漁法を教わ

ったものである。

宮古列島 追込み網漁のことをウーギャンと呼んでいる。宮古列島の伊良部町には追込み網漁の組は2統存在するが、そのうちの1統はグルクン専門で、もう1統は雑魚を獲る。後者は5名で行い、漁業者全員が50歳を超えている。深いところでは水深15m、浅いところでは水深2～3mのところで行う。袋網の奥行きが13m、袖網が片方で40～50m、両方で100mという小規模なものである。

八重山列島 八重山では追込み網漁の組は実質1統しかなく、季節的に小規模で行う組を入れても3統にすぎない。追込み網漁には2種類あり、ありとあらゆる魚を獲る場合と、グルクンを専門に獲る場合がある。以前、石垣市の新川に存在した追込み網漁は後者である。歴史的には、その以前のグルクン専門の追込み網漁というのは、数十名の大規模な人数で年中行っていたが、9～10年前に消滅している。しかし、他の魚の追込み網漁は石垣市に3統ある。そのうちの一つは、船にエアー・コンプレッサーを装備しアクアラングを使用して、ブダイ（方言名イラブチャー）を4～5名で獲る。かなり小型の追込み網漁であるが、アクアラング使用によって少人数操業が可能となる。

石垣の登野城と新川を比較すると、登野城では網仕事はしないという。ゆえに現在も追込み網漁は新川には3統あるが、登野城にはない（後掲表4参照）。

新栄町のY. K. 氏（65）は糸満出身の義父から、「追込み網漁はこのままだとどんどん廃れていく。どうしても継承して欲しい」と頼まれたのがきっかけで、追込み網漁であるチナカキヤーに取り組んでもう40年になるという⁽¹³⁾。終戦後の石垣島のチナカキヤーの規模は20～28名であったが、綱を機械で引っ張るなど、次第に近代化され現在は5～12名で行っている。

類型Ⅱの小括 奄美大島へ糸満漁民がやって来るようになったのは明治初年の頃だといわれるが、追込み網漁の組は1913年の西久組を濫觴とする。西久組は40～50人の大規模集団で、加計呂麻島を基地にすることもあった。現在の奄美大島南部（古仁屋）の追込み網漁の組は、上原組と池田組の2統である。どちらも他の漁は個人で素潜りを少し行う程度で、専ら追込み網漁を行う網組である。周年操業のタイプで、類型Ⅱに属する。石垣島では採貝を目的とする糸満漁民の来島は既に明治30年代にみられたが、追込み網漁を行うための出漁は、それより遅れて大正初期に遡る。

しかし宮古・石垣で現在行われている追込み網漁は近代化されており、組の組織は比較的新しく、少人数で専門化している。表3の追込み網漁の類型からみると、技術レベルが高いのは類型Ⅱの奄美大島・宮古列島・石垣島である。宮古列島の佐良浜の南方漁業（カツオ漁）は、本土の漁業者と比較にならないくらい高度な技術レベルであった。カツオ漁の好不況を握るのはカツオの餌の採捕技術によるが、それを追込み網漁で獲る。つまり佐良浜の漁業者は、リーフの地形を覚えるのが素早く、追込み網漁の技術に関しては全くレベルが違っていたといわれる。

(5) 類型Ⅲの地域

導入が相対的に新しい類型で、いずれも季節的操業である。

甌島 歴史的にみると、近世から甌島近辺こしきじまに他地域からの入漁があったのは、甌島周辺が好漁場だったからでもある。甌島の磯追込み網漁は、「瀬網」とも「魚瀬」とも呼ぶ漁法で、その起源は古い。現況としては里村に4統あり、うち3統は古くからの網元制によるが、1統は新しい型式の共同網である。桑之浦には2統あったが、現在はない。鹿島村には2~3年前まで数組の追込み網漁の組があったが、現在は1組が存在するのみである。

追込み網漁の組が減少したのは、従事者の高齢化と若年の新規労働力が確保できなかったためである。また鹿島村では、カジキ流し網漁が行われており、その漁業に追込み網漁の労働力が吸収されていったことも理由として指摘できる。

甌島での追込み網漁の特色は、カズキと称される魚を追込む役をする人が約10名いることと、カズラ縄と呼ばれる威し具を用いて魚を追うことである。この漁で獲れる魚は、カマス・イサキ・クロダイ・インダイなどである。

伊平屋島 現在の伊平屋島の追込み網漁は、アゲヤ・グループと呼ばれ、3~5月に行われる季節的で自給的な漁撈である。しかし、以前にはワリジケーというサンゴ礁の窪みを利用した追込み網漁が行われていた⁽¹⁴⁾。数人が一組となってサバニに乗り組み、潮が半分くらい引いた時に、沖の方から舟を回してワリ（窪み）に近づき、2人が潜ってその出口に網を張る。他の者もワリに飛び込んで潜り、口で息を吹いて泡を出したり、手で水面を叩いたりして魚を追うというものである。

伊是名島 かつて伊是名村には各字にそれぞれアギヤの組合があったが、現況としては内花にグルクン=アギヤの組合が1統あるにすぎない。これは12~13名の規模で、素潜りをする者とボンベを使用する者が半々である。『伊是名村史』⁽¹⁵⁾によると、他にウワダ=アギヤやヒカグワ（スズメダイ）=アギヤなどの呼称がある。

多良間島・水納島 多良間での追込み網漁は、バダヤクムリ⁽¹⁶⁾に仕掛けておいた網に向かって、水面を叩きながら追込むというものである。浅い場所で追込むピスイダウ=アツヴェンウーなどもこれに類する⁽¹⁷⁾。

類型Ⅲの小括 甌島は好漁場なので、近隣地域の漁民の進出が早かったが、追込み網漁については、おそらくボンベの普及以後であるから、他地域に比べると遅かった。甌島の追込み網漁は沖縄式が伝わったものと思われるが、南西諸島各地の追込み網漁と異なり、糸満漁民の系譜は全くない。

伊平屋島・伊是名島には、追込み網漁を行う糸満漁民の来島は少なかった。むしろ、伊平屋・伊是名から糸満の方へ出漁したり、ヤトイングワとして雇われに行ったりする例は数多くある。ゆえに追込み網漁の伝播は比較的新しいものであり、季節性が強いために類型Ⅲに帰属させることができる。

(6) 追込み網漁が廃絶した地域

南西諸島には、追込み網漁が現在は廃れてしまったが、以前は盛んであった種子島・屋久島・奄美大島（笠利町・名瀬市）・喜界島・徳之島・久高島・久米島などの地域がある。

屋久島 屋久島は潮流が速く、素潜りに適さない環境であるが、中間に定住した与論島出身者を中心に、地元の人を加えて、追込み網漁が昭和10年頃から昭和40年頃まで行われていた⁽¹⁸⁾。

久高島 久高島では追込み網漁はアンティキヤー（綱づかいという意味）と呼ばれるもので、4～5名でもできるが、普通は12～13名で行っていた。アンティキヤーは戦前には2統あった。パンタタカーは綱を入れないのに対し、アンティキヤーは綱（ロープ）を2艘の船で引っ張って行く。アンティキヤーに行けない時にイノー（裾礁）へ行ってパンタタカーをする。

久米島 久米島で昭和52～62年に行われていた追込み網漁の組は田端組であった。それ以前の時の組は金城組と呼ばれていた。田端組の多いときの人員は約45名、少ない時の人員は14～15名で行っていた。那覇・宜野湾・浦添の人もいたが、彼らは2～3年ぐらいしか行わなかった。操業範囲は慶良間諸島・久米島周辺であり、人員の構成としては特に慶良間の人が多く、約60名いた。

(7) 小括

追込み網漁が現在も周年操業している地域で特に歴史が古い地域は、奄美大島・宮古列島・石垣島である。これらの地域では、明治末期の糸満漁民による出稼ぎの形態を経て、さらに地元に着する大正初期に遡る。現在は少人数（5～10人）で行いながらもボンベを使用するため効率がよい。他の漁を行わない専門的な漁撈集団である（類型Ⅰ）。

一方、かつては周年操業であったが、現在は季節的に行っているにすぎないのは与論島・沖永良部島である。年間稼働日数も減少しつつあり、衰退過程にある（類型Ⅱ）。

大型の追込み網漁（アギヤー）が沖縄本島で勃興してくるのは明治の中頃であり、水中メガネ（ミーカガン）の普及と軌を一にする。八重山列島・宮古列島・奄美大島に水中メガネが伝わるのもそれから間もなくであり、糸満漁民の出漁や移住に伴うものである。糸満漁民は明治政府により海外移住が許可されるといち早く南方漁域に出漁し、沖縄式追込み網漁を試みている。以前の八重山列島・宮古列島・奄美大島の追込み網漁の特徴は、いずれも大人数（30～40名）の糸満（ないし与論）の漁夫をチーム・リーダーとしていたことである。しかも多数の年少の少年（ヤトイングワ）を配下に抱えていた。そして苛酷な少年労働であるヤトイングワによってアギヤー漁は支えられていた。沖縄各地の沿岸には裾礁が発達して海が浅く、外洋の底質は岩石である。ここにはフエダイやチョウチョウウオの類が群棲して追込み網の使用に適している。その自然条件が共通するゆえに、八重山列島・宮古列島・奄美大島にも追込み漁が伝播した。

しかし沖縄式追込み網漁は、その発祥の地である沖縄本島ではあまり継承されず、その周辺地域（八重山・宮古・奄美）で残存率が高い。それは本島周辺では地引網（佐敷町ではスンチャー網と呼ばれる）は行われていたが、網漁全体は不振であったこと、専門者が少なかったこと、また漁業権が設定されてよそ者の沿岸漁業締め出されたことが要因であろう。体力的に追込み漁はきつく、人数が揃わないと漁自体ができない、そのため高収入を得るために一本釣りや延縄に切り換えた人が多く、後継者難の時代を迎えている。しかし、沖縄においてはサンゴ礁地形とそこに棲息する魚種からみると、この追込み網漁は最もその自然条件に適した漁法であるため、おそ

らく長く継承されるであろうと思われる。

第2章 潜り漁

(1) 海士の分布と類型

もともと魚突きを行う潜り漁は、日本列島に広く分布していたという推定がされている。それが現在の分布でみると、海士が日本の南西部・東北地方に多く、中央日本に少ないのは、近畿・東海では漁業技術の進歩が早かったので、海士は別種の漁業に吸収されたからではないかという説がある⁽¹⁹⁾。

日本列島にはもともと海士が多かった。しかし、江戸時代以降は、沿岸漁業の発達により、鯨組の羽差しに移ったり、マグロ漁・カツオ釣り・イワシ網などに移ったりした海士が多く、ダイバーとしては女性の方が相対的に目立ってきたといえるのではないか。

潜り漁のベテランの人は減っており、表5に示した類型Ⅰは廃れつつある。奄美の古仁屋、糸満、久高にはかつて潜り漁のプロの人がたくさんいたが、今では合わせて数名程度である。潜り漁のベテランの人と類型Ⅰの地域のみならず各地に点在している。

潜り漁は本土と南西諸島で大きく異なる。本土では銚子を使って瀬魚を突き獲るホコ突きが非常に少ない。それは採捕対象にも大きく表れている。宮崎県以南は海士のみ分布するといって差し支えないが、宮崎県と鹿児島県の本土側の採捕対象はウニ・アワビ・トコブシ・海藻がほとんどで、瀬魚・タコ・コウイカなどの採捕は僅かである。これに対し南西諸島ではその逆になり、瀬魚・タコ・イセエビ・コウイカ・貝類などを採捕するが、ウニ・アワビ・トコブシの採捕は少ない(表4)。

だが時代を遡れば東北地方や関東地方でも銚子突きをする海士はいたようであり、祭りの日にしたり、遊びとして銚子突きをしたりすることも行われていた⁽²⁰⁾。

なぜ本土は海士と海女が入り混じっているのに対して、南西諸島では海士のための銚子突きの潜り漁が盛んなのであろうか。それはサンゴ礁の地形が共通していること、水温が高く冬でも潜りができて专业化しやすいこと、ブダイなど獲りやすい魚が生息していること、サンゴでは釣り針を失いやすいこと、慣わしとして定着していること、女性にとって水棲動物を獲るのは体力的にきついことなど、様々な要因が絡んでいる。

糸満漁夫のような伝統的な素潜り漁の名残の見られるところは奄美大島南部(古仁屋)と石垣島であった。しかし、これも2世、3世の時代に入りつつある。

類型としては、種子島・屋久島・奄美諸島には潜り漁の専門者がおり、その人たちは魚が寝ていて突きやすい夜間には潜り漁を行わず、昼間に行うベテランである。

またデントウ(電灯)モグリをする人がかなり多くいるのは、類型Ⅱの石垣島と宮古列島であり、瀬魚・タコ・イセエビ・貝類を専門に獲る。筆者の聞き取りによると、石垣島・宮古列島でデントウモグリをする人たちは、ボンベを使用する例が多いようである。以上を踏まえて、潜り漁の類型試案を図式化すると表5のようになる。

表4 採捕物別による潜り漁の実態

項目 地域	地域	市町村名	漁村名	組合 人数	漁法別		素潜りの採捕物別従事者(人)										専 兼 業	グ ル ー プ	備 考		
					追込み (ボンベ 使用)	素潜り	潜り漁(人)		瀬 魚	タ コ	イ セ エ ビ	コ ウ イ カ	ウ ニ	ア ワ ビ	ナ マ コ	ト サ カ ノ リ				そ の 他	
							ア ク ア ラ ン グ 使 用 の 潜 り														
九州	薩摩	顛娃町	門之浦			0	9								6						
		阿久根市	赤瀬川	316		32	0				32	32							※4		
		長島町	指江	181		2	12	△	△			△	△		12	100	※2		※5		
		坊之津町	久志			1	0						1						※6		
	大隈	日南市	油津	245		3~4	7~8	△				△	△						兼業	※7	
		串間市	都井岬	127		20	0					20								※8	
			福島	203		16	0					16									
	志布志町	夏井	130		4	2					△		△		△	※3		専業			
	内之浦町	南方	160		0	15								15				他の漁と兼業	※7		
南 西 諸 島	種子島	西之表市	田之脇	約200		0	0							△	※1			他の漁と兼業	※10		
			浅川			3	0			15(10年前)									他の漁と兼業		
		松島			400		△	△	△	△			400	※1					○	※11	
	屋久島	上屋久町	宮の浦	78		消滅									△	※1				※12	
		屋久町	安房	72	トビウオ ロープ	4~5		△	△		△								専業	○	※13
	奄美大島	笠利町	赤木名	45	消滅	15		△											専業		※14
		名瀬市	港町	112	消滅	12					△										
		瀬戸内町	古仁屋	131	2統	27	3	△	△	△	△									潜りと追込みとの兼業, 他は専業	※15
	加計呂麻				1		△	△												※16	
	徳之島	天城町	亀津	210		7~8	1	△											専業	※17	
	沖永良部島	知名町	知名	66		0														他の漁と兼業	
		和泊町	国頭			3~4		△				△								○	
	与論島	与論町	茶花	準含め 300	○	30	12	△												専業が多い	
	沖縄本島	知念町	久高島	33	行事	1	8~9	△	△		△									兼業が多い	
糸満市		西崎	488	消滅	1	1													専業	※18	
		本部町	健堅	91		2		△	△										専業	※19	
伊平屋島	伊平屋村	我喜屋	41		7~8	0	△		△												
伊是名島	伊是名村	内花		1統	消滅																
久米島	仲里村	真泊	124	消滅	6~7	5~6	△	△		△											
宮古島	伊良部町	池間添	164	2統	10	20	△	△		△									専業	※20	
	平良市	狩俣	143		5	32	△	△													
石垣島	石垣市	登野城	335	3統	5	160	△	△		△									専業	※21	
		新川																			

(注) △若干名 ※1 トコブシ, ※2 採貝, ※3 カキ (聞き取り資料により筆者作成)。
 ※4: 潜水組合がある。 ※5: 近年までイザリを行っている。 ※6: この周辺には潜りが少ない。 ※7: 宮崎にもホコ突きがある。 ※8: 串間から東へ行くと潜りが増える。 ※9: 潜水器がないと深いため潜れない(15m)。 ※10: 東海岸は潮流も荒く潜りも少ない。 ※11: 馬毛島へトビウオ漁の季節移住がある。 ※12: 志戸子など昔は盛んであった。 ※13: 与論からの移住者が多い。 ※14: 船を所有しない人は皆潜りをする。 ※15: 沖縄からの移住者が多い(漁師町)。 ※16: 秋徳出身の追込み網漁のグループがある。 ※17: もともと漁業は盛んではない。 ※18: 一本釣りに切り替わっている。 ※19: 規模の大きい追込み網漁のグループがあった。 ※20: いろいろなタイプの漁業がある。 ※21: 網仕事を人はいない。 ※22: チチカキヤークツオの餌獲り。

類型ⅡとⅣのデントウモグリをする人たちは、昼間はエビが獲れないと思い込んでいる人たちで、技術のレベルはそう高くはない。しかし夜の潜り漁は昼の潜り漁より収益が2~3倍多いためますます増える傾向にある。

表5 現在の潜り漁の類型

項目	昼 間	デントウ（電灯）モグリ
専 業	I：沖縄本島糸満 奄美大島南部 種子島 屋久島 沖永良部島	II：石垣島 宮古列島 久高島 久米島 伊平屋島
兼 業	III：種子島（トコブシ） 阿久根（ウニ） 串間（ウニ） 内之浦（トサカノリ）	IV：奄美大島北部

（ ）印はグループで採捕

注：I > II > IV > IIIの順に技術的に高度になる。

類型IIIの人たちは、解禁になったシーズンのみ潜り漁を行う人たちで、主に他の漁との兼業者である。また別の職種との兼業をしている人もいる。類型IIIの人たちは確かに昼間に漁を行うのだが、それはトコブシであるにしるウニにしる、高度な技術を持ち合わせてなくてもできる季節的な漁である。

さて類型IVの範疇に入るのは、奄美の名瀬の素潜り漁で、イセエビを獲る兼業の人たちである。イセエビは夜間には穴の奥に入らず、サンゴの下や砂浜で群れているので獲りやすい。8月にイセエビが解禁になると同時に漁師は夜に潜るが、彼らは通常はボンベを使用しない。

沖縄本島の周辺離島である久高島では昔から素潜りは盛んであったが、現在では素潜りを行う人は1名、エアー・コンプレッサー⁽²¹⁾を使用して潜っている人が7~8名いるにすぎない。久高では、両者を比較すると作業効率が全く違うので。あえて分類するならば、久高島の潜りは類型IIに入る。このように見てくると類型IIの地域では多人数で夜間に潜り、潜水器を使用するという新しいタイプの漁法であり、漁業のフロンティア地域といえる。

同じく沖縄本島の周辺離島である久米島の場合は、素潜りが6~7名で、ボンベ使用が5~6名現在操業している。夜間に潜水する人が多いので類型IIに入る。また、伊平屋島では漁協が冬場だけのボンベの使用を認めているが、デントウモグリが増えているため、類型IIに含める。

表5の枠組みは「グループ採捕」、すなわち集団採捕を意味する。種子島ではアラなどの大物の魚を捕獲する際、3人がかりでないとできない場合もある⁽²²⁾。一人がオーズキ（鉗）で穴の中にいる魚の鰓や眼に引っ掛けて引きずり出す。他の人は船の上から見ていて、交代で受け渡しをする。こうした複数で出漁することも、たとえばスミズキガイシャ（潜ることをスムという）などと呼ばれて、以前は盛んであった。

(2) 類型Iの地域

奄美大島南部 奄美大島南部では約20名の素潜り漁を行う人がいるが、そのうち半数がサラリーマンや農業との兼業で、準組合員である場合が多い。しかしながら古仁屋では糸満や与論から寄留した後、定着した人も多い地域である。

奄美のホコ突き⁽²³⁾で捕るのは、ブダイ・ハタ類・イセエビ・イカ類・タコである。奄美では11月頃からコーイカとイセエビの専門になる。奄美ではイセエビ獲りやコーイカ獲りも、また追込

み網漁もすべて請島方面の瀬戸内町の海域の外側が漁場で、湾内にはいない。奄美の瀬戸内町の海域には、リーフ⁽²⁴⁾が広く、魚類ほか水棲動物はすべて自然の状況に応じたりーフ内のそれぞれの棲息場所に産卵に来る。獲物によってそれぞれ住処の作り方が異なるが、瀬戸内町内の沿岸域には水棲動物の棲息場所となるポイントが多い。

また、奄美諸島では兼業が多い。奄美大島などのようなサトウキビの産地では収穫期には潜りに行かないという人が多い。

種子島 一本釣りが200~300名、建て網が約200名、素潜りの潜水漁業が兼業やトコブシの採捕を含めると非常に多くて400~500名である。その他にキビナゴの刺し網、モジャコ（ブリの稚魚）漁、小型定置網などが行われている。

種子島の潜り漁は、類型Iに属するのであるが、やはり銛突きの素潜り漁は廃れてきている。種子島全体で10名程度である。しかし種子島では、ボンベを使用する漁業者も少なく、近代化も進んでいないのが現状である。

種子島の特徴としては、採捕対象物の中にトコブシ⁽²⁵⁾とトビウオがあることである。

トコブシ貝は小型のアワビに似ているが、同じ種類ではない。関東以南に産し、種子島・屋久島に多産する。種子島には、素潜りでトコブシを捕る人が400~500名ほどいるが、季節的なものである。専業ではないのだが、組合員になっている人が多い。

屋久島・トカラ列島・糸満でもトビウオ漁は行われていたが、戦前・戦後を通じて最もトビウオ漁の盛んだった地区が馬毛島と種子島の大崎地区であった。種子島の初夏の風物詩の一つが日干しに晒されているトッピー（トビウオ）だった。

その他の採捕物としてタコがあるが、種子島の^{あさこう}浅川には、以前タコ獲りが十数名いた。田辺⁽²⁶⁾によると浅川は農業が中心であるため漁業をする人は少ないのだが、男性による素潜り漁は僅かながら継承されてきた。庄司浦には素潜りをする人はいないが、イザリによるタコ獲りが少し行われている。また地域的に見ると、田之脇には現在、専門の潜りをする人はいないが、ナガラメスミ（種子島では潜水することをスミという）を行う人が1970年代まで何人かいた（表4）。

種子島でみられるさらなる特徴としてブツミ（テングサ採り）があった⁽²⁷⁾。主として女性の仕事で馬毛島に季節移住して行っていた。ある程度潜水して行き、岩に生えているブトを草を引くように起こして摘み、ククリ（網袋）に入れる。それを陸上に揚げ乾燥させ出荷する。

屋久島 屋久島の概況としては、^{あんぼう}安房地区ではロープ曳きトビウオ浮敷網が主であり、また栗生地区では瀬物一本釣りが主であり、他に磯建て網、アサヒカニかかり網、モジャコ漁などが行われている。屋久島の潜り漁の現況は、種子島と同じで銛突き専門の素潜りの漁業者はかなり減少し、屋久島全体で数名もいない程度である。また種子島と同様、魚体の大きいアラ・ハチキ・アカジョウなどを捕獲する際、グループを組んで出漁していたが、それも行われなくなった（表4参照）。

歴史的経緯としては、大正時代までは、屋久島の宮之浦でもナガラメが獲れていた。石を起こすと拳大のものが獲れ、自家用にしていた。現在でも安房にナガラメを季節的に採る人が数人い

る。『上屋久町の民俗』⁽²⁸⁾によると、屋久島の志戸子には昔メガネ作りの職人がいて、一人一人の顔に合わせて真鍮製のメガネを作っていた。このことから、いかに志戸子で潜りが盛んだったかがわかる。屋久島の船行では、イセエビやタコを捕っていたが、一般の人はオーズキ（鉗）で、本職の人がヒッカケ（鉤）を使った。

屋久町の安房は、船40艘、漁民150名で、ほとんどヤマハ系の高速エンジンで漁を行っている。魚はまた増え始めたという人もいるものの、現在では海藻がまったく生えていない。「以前は9~10月になると、モ（ホンダワラ）が1mほど伸びたのに」という声もきかれる。漁協としては素潜りの人のため稚貝の放流をしている。潜る人は許可が必要である。現在は組合費として年12万円を漁協に支払う。

与論島 現況としては、一本釣りが約50名、延縄が6~7隻、マグロの旗流しが約10名、その他の旗流しが約30名である。準組合員は曳き縄と素潜りだけを行っている。準組合員で素潜りを行う人は潜在的に120名程度はいるという。

与論島の自然環境は素潜りに適し、沿岸部の遠いところで約4km、近いところでは500mくらい沖合までサンゴ礁が取り巻いていて、干潮には幅約100mくらいの干潟が浮き上がる。このサンゴ礁の内側（内海）をウチヌンと呼び、クサビ釣りや突き漁を行う好漁場となっている。また与論島の東海岸は、イノー（ウチヌン）が広いので、ある程度大きな魚が捕れた。

与論島の人々は、子供時代からトントミ突き（素潜りによる突刺漁）に親しんでおり、奄美諸島の中では比較的漁への関心が高い島であるといえよう。しかし今ではもう与論島では潜る人が減少し、後継者が育たず、漁協としても困っている状況である。

沖永良部島 瀬戸一本釣り、パヤオ（浮き魚礁）を利用した旗流し、曳き網、ソデイカ旗流し、追込み網が行われているが、専門の漁業は発達していなかった⁽²⁹⁾。

国頭^{くにがみ}では、以前素潜りを行う人は十数名もいたが、現在では3~4名である。魚を入れる容器を持つ人や水中鉗を持つ人など役割分担があり、めいめいが別々に獲物を見つけて潜り、協力しあって獲る。

その他の採捕物としてタコがある。喜界島では、潮の干満を見て昼夜の別なくタコ捕りを行うが、沖永良部島ではプロの漁民が主に昼、潮の干満にかかわらずタコ捕りを行う。

類型Iの小活 類型Iは、専門の人たちが昼間に潜り漁を行うタイプである。奄美大島南部（古仁屋）では、サラリーマンなどとの兼業や他の漁（例えば延縄など）との兼業も多いのではあるが、魚類が捕獲しにくい昼間にもかかわらず、専門として潜水する素潜りのプロの漁民が数名ほど現在も存在する。さらに種子島や屋久島では素潜り漁が廃れていく傾向が強いが、デントウモグリは普及しておらず、潜水する漁民も素潜りの人が多い。屋久島の安房に在住する少数の素潜りのベテランは昼間に行う専門家で、類型Iに属する。

類型Iの奄美大島・種子島・屋久島・沖永良部島では、必ずしも糸満系漁民ばかりとは限らないが、糸満系漁民の移住先であったことは確かであり、その潜水技術は非常に優れていた。現在も素潜りの伝統漁法を受け継いでいる人が多い。

(3) 類型Ⅱの地域

宮古（平良） 平良では元来サバニを用いて一本釣りをする人が昔から多かったが、昔は大部分の人が素潜りをしていた。そして現在はモズクの養殖（生産量は7割、2003年）、パヤオ（浮き漁礁）漁、近海一本釣り、深海一本釣り、曳き縄、刺し網、イカ釣り、小型定置網、採貝が中心である。他に池間島で石巻落としが行われている。平良の潜り漁の現況としては、素潜り漁をする人は急激に減少して数名ほどになったが、県知事の許可を受けてボンベを背負ってデントウモグリをする人が32名ほどに増えている。また素潜り漁でもデントウモグリが多い。それに対し伊良部島では、まだ伝統的な銚突きの素潜り漁を昼間に行っている人が若干名いる。

宮古（伊良部島） 沿岸マグロ、カツオ漁、パヤオ漁（シビ・カツオ・シイラ）、追込み網漁、ホコ突きである。他にブーケと呼ばれる集魚灯をつけてイワシを獲る漁が行われている。素潜りを行う人は兼業も含め約12名である。

潜り漁は、伊良部島では近年まで5～6名のグループでエア・コンプレッサーを船に備えて、ボンベを背負って銚突きをする人が4グループあったが、現在は3グループである。そして1人がボンベの空気をコンプレッサーで充填する。残りの数人が400～500mの間隔をおいて漁をする。銚を使うので、ホースは使えない。

八重山（石垣市） マチ類などを獲る一本釣りが中心で、一本釣りの会の会員が約80名、その他に潜水器、定置網、刺し網が行われている。

潜り漁ではタカセガイを採る人は多いが、貝の総漁獲量としては少ない。石垣市には今でもデントウモグリ研究会というグループがあり、約60名が加入している。この会は、年一回延縄で鮫駆除（退治）を行っており、参加者が多い。この会に入らずにデントウモグリをする人は、潜在的に100名はいるという。夜間だけではなく、昼間も突いている人もいる。現在では糸満出身の人は釣りを主に行っているという。

類型Ⅱの小活 潜り漁はボンベ使用が多く、専業で潜水する人が非常に多い。また、魚類が捕獲しやすい夜に潜るデントウモグリをする人が非常に多い。ただ技術レベルは概して高くないが、専業でしかも夜型であるので、類型Ⅱに属する。また、石垣島は特に漁獲量が多く、宮古列島の3～6倍あるという。ウェットスーツ・ドライスーツや水中銃、さらにはバッテリー電池やボンベの普及によって、漁獲効率が何倍もよくなったことがその要因である。宮古・石垣の漁民は、午後8時から午前2時まで潜るが、収益も昼間に潜水するタイプよりも、2～3倍多いという。

一方、次に述べる類型Ⅲと類型Ⅳは素潜り専業ではなく、他の漁を営みながらその地域の特産物を季節的に採捕するというタイプである。

(4) 類型Ⅲの地域

東串間 概況としては定置網が中心で、その他に一本釣りが約15名、曳き縄、ウニの素潜りを行っている。潜り漁の現況としては、宮崎県串間市都井（漁協の管轄では都井岬漁協）では、ボンベを使って潜りをする人はいない。素潜りをする人が20名ほどいるが、ウニ採りがほとん

どである。その他の採捕物としてはトコブシ・アワビ・サザエ・タコ・エビなどがある。エビについては、一般に使用されているエビ網より少し網の目の大きさが小さいエビ網を使って、海底に張りめぐらす。一人で潜って行うので潜りの範疇に入る。

潜りが許可事業に入るかどうかは問題であるが、実際は地先の漁業権内で漁民が漁協に行使料を支払って行っている。最終的に行ってよいかどうかは漁協の組合長が決めるが、漁民の側でも部会を開いて、自主的に禁漁区を設定して獲ってよいかどうかを決めている。

アワビは、希少価値がある分好まれるし、またトコブシは、アワビほどの肉質がないので商品価値は劣る。全体としては、アワビよりトコブシのほうが漁獲量は多い。また東串間では専門に海藻を採る人がいないので、他地域から来てテングサを採る人がいる。貝類は近年成長が悪く2001年は特に不漁であった。それには水温が関係しており、暖かかったために太らなかったといわれる。貝類もウニと同様水温が低い方がよく、適温としては10～13度である。

串間 水揚げ高でみると養殖が70～80%を占める。他に10t未満のマグロ船が1隻、19tのマグロ船が2隻、小型底曳き網が7統、定置網があり、一本釣りもおこなわれている。

潜り漁の現況としては、素潜りでウニ採りを行っている人が14名ほどいる。全員漁協組合員で、男性ばかりである。かなり高齢化しており、人数も減少している。それは新規に始めるのが体力的にきつからであり、耳に障害が出るし、内蔵（特に肺）を悪くするために嫌われているからである。ほとんどの漁民が、沿岸から10m以内の距離のところでは漁をし、船で行かず一人で泳いで行く。

素潜りはもともと他の漁との兼業が多いが、串間ではウニによる収入が70%、その他の収入が30%となっている。ウニのみを捕る人は3名である。他の漁との兼業としては建て網を行っている人がいる。素潜りによるその他の採捕物としては、サザエ・トコブシ・ナマコが多少ある。

志布志町 底引き網と建て網があり、他にバッチと呼ばれるチリメンジャコの機船曳き網がある。現況としては、素潜りを行う人は5名である。ボンベは禁止されているが、スキューバの免許を持っている人は5名いる。

採捕物については、鹿児島県や宮崎県串間ではアワビも少なからず見られるが、主に水深10m位の深いところにいるという。アワビは海藻が生えていないと全く育たず、逆に海藻の生えているところは必ずアワビはいるとあってよい。そのため居場所は線を引いたようはっきりしているという。なお、この近辺は潮が速いため、魚が潮に向かっている時は潜っても追いつかない。

内之浦町 大型の定置網が5統、小型の定置網が3統、巻き網が4統であり、他にエビの刺し網・磯建て網がある。

潜り漁の現況については、佐多漁協と内之浦漁協は、4月1日から8月31日までの間、赤いトサカノリを採っている。そのため内之浦漁協は佐多漁協と常に連絡を取っている。トサカノリの他はサザエを少し採るだけで、あまり他のものは採らない。サザエなどを専門にして生活している人はいない。

漁協の事業としては、アワビの稚貝の放流をしている。またトサカノリの増殖の実験もしているし、コンクリートのブロックを入れたり、海に投石したりもしている。それにもかかわらず、トサカノリの水揚げ高は年々落ち込んでいる。投石した石に他の海藻が付くとトサカノリが付かなくなる。トサカノリは国外では生息していない。国内では伊豆大島でも採れるが、屋久島では内之浦や佐多よりさらに少なくなる。トサカノリが採れる要因は、潮の流れと最も関わりがある。つまり潮によって菌が増えるからである。

佐多町 養殖が1経営体、キビナゴの刺し網が8経営体（8名）、定置網などが行われている。潜り漁の現況としては、佐多岬（漁協の管轄による）・佐多の方には、トサカノリを専門に採る人が30～40名ほどいて、一日に20t位採っている。内之浦では採る人が12～14名で、よくても一日2～3t位しか採れない。

トサカノリの価格は低迷しており、10年前は漁協単位では30日で400万円分の水揚げがあり、キログラム当たり1400円であった。現在ではキログラム当たり700～800円下がっている。漁民が他の漁をしながらトサカノリの採取を付随的に行っており、いい時期になると採るのが現状である。つまり季節的であり兼業である。採捕基準とされているのが赤いトサカノリで、出荷の時に、見た目をよくするために石灰を入れて緑色に染める。トサカノリの生息する場所の平均の深さは13～14mであり、ボンベで潜る。ボンベは県の許可が要る。鎌は使わず手袋をつけてむしり取る。

長島町 巻き網、ゴチ網、小型定置網、建て網、一本釣りが行われている。さらに長島町の北側では、ブリ・タイ・フグなどの高級魚が養殖され、そのほとんどが関東・関西方面へ出荷されている。

潜り漁の現況としては、長島では潜水器（エアー・コンプレッサー）を使って漁をする人が12～13名いる。主にトサカノリを採っているが、他にアワビ・ウニも採っている。現在、ボンベ使用は禁止されている。トサカノリの採取は、昭和40年代頃に朝鮮から来た人が始めたもので、地元の人がそれに応じて始めたといわれる。トサカノリの採捕は組合で許可事業としている。その他の採捕物として、海藻であるテングサ・マクリ・ホンダワラがある。これらは量的に少ないので採算的には問題があり、漁協としては採っていない。地元の人が自家用程度に素潜りで採っているにすぎない。

長島は資源としてウニ・アワビ・サザエは豊富である。これも素潜りで採る。ウニは繁殖しやすいように海藻の生えたところに、秋口に移植することが行われている。つまり自然に生息している場所で色付きが悪い場合は、新しい海藻の茂った場所に移し直すとウニの中に生殖腺がよく発達し、色付きもよくなるという。

阿久根市黒之浜 一本釣り、巻き網、ゴチ網、掬い網、延縄、磯建て網、敷き網、潜水器、定置網、タコ籠が行われており、イザリは禁止されている。

黒之浜の潜り漁の現況は潜水器使用が8名で、一代限りの許可制にしている。瀬魚を水中銃で突く素潜りをする人は3名いる。イカは一本釣りだが、タコは素潜りで獲る。しかし、これは自家消費の「おかず採り」であって、市場には出していない。

素潜りを行う人は、昭和30年代頃は10名くらいいたが、それ以降は下降気味で、昭和40年頃から少なくなった。

漁場は漁業権内で、行使料を支払った上で漁を行う。磯建て網で5000円、潜水器使用は1万円の漁場使用料を運営委員会が徴収する。

阿久根市 阿久根市の概況は、一本釣り、ウニとアワビ、建て網、底曳き網、タコ籠が行われている。その中では、佐潟も含めると、素潜りによるウニ漁が中心である。陸地から出帆して、かなり浅いところで採る。一本釣りは兼業も含めると200名（黒之浜・佐潟も含む）は下らないという。また、水揚げ高では巻き網が多い。

その他の採捕物として海藻類があるが、ヒジキ・ワカメ・フノリ・テングサが採捕されており、これは漁協組合員の主婦たちが兼業で行っている。トサカノリは、年によっては多く採れる年もあるが、毎年若干量だけを採り、それ以上は採らないのが現状である。他に棒受網、巻き網、ゴチ網、小型底曳き網などを行っている人がいる。ここでは潜水組合が組織され、32名が加入している。また栽培漁業センターでアワビの稚貝の育成を行っている。

阿久根市佐潟は200戸余りの漁村である。十数隻の磯建て網船（7～8t）のほかは、潜り漁業が中心で、海士集落といえる。現在はタイ一本釣りが5名、刺し網が3名、ウニの潜り漁が60名ほどである。

類型Ⅲの小活 類型Ⅲは兼業で地域の特産物を昼間に獲るタイプである。類型Ⅲの地域は、宮崎県串間市や鹿児島県阿久根市のウニ採りにしろ、鹿児島県内之浦町のトサカノリにしろ、種子島のトコブシにしろ、漁獲物が夜間に取り易いという事情もないので、昼間に潜り、夜型の生活をしない。これらの採捕物は年間に亘って獲るものでなく、短期間に獲られるものである。すなわちウニは12～7月、トコブシは5～8月、トサカノリは4～8月というように短期間だけ専門的に獲られる。類型Ⅲの地域では、他の漁との兼業が主であり、また他の職種（例えば養鶏やサラリーマンなど）との兼業も多い。

(5) 類型Ⅳの地域

奄美大島北部 ^{なせ}名瀬の漁業は、一本釣り^{なせ}と素潜りのイセエビ獲りが中心であり、後者は漁協組合員の十数名前後が従事し、前者はそれ以外の組合員のほとんどが行っている。

組合員はかなり高齢化しており、漁協で後継者育成のために、新規に始めた（正組合員になって1年以上）人には年間60万円の育成資金を出している。

(6) 素潜りが盛んでない地域

現在、鹿児島県と沖縄県で素潜りの盛んでない地域は、根占町・知覧町・山川町・甌島・トカラ列島・喜界島・沖縄本島とその周辺離島・与那国島であるが、これらのうち根占町・知覧町・山川町・トカラ列島・喜界島・沖縄本島とその周辺離島について述べる。喜界島・沖縄本島とその周辺離島は、かつては盛んであった地域である。

根占町 イセエビは、本土では南西諸島とは異なり、網で獲る。根占では16名が漁獲を認め

られ、漁協に年 2000 円の行使料を支払っている。漁場は 16 区に分けられ一晩網を置いたら、次の日順繰りに漁区を換える。

知覧町 歴史的に見ると、知覧町の松ヶ浦では、潜って砂の中にいるワタリガニを突いて捕ることが近時まで行われていた。現在ではワタリガニも少なくなり、潜りをする人もいなくなった。

知覧町の大川では、イセエビを建て網で捕る。闇夜で波のある日に網を入れるわけだから、かなり網を傷めるらしい⁽³⁰⁾。

現況としては、『知覧町の民俗』⁽³¹⁾によると、岩についている貝は素手では採れないので、鉄の棒「アセイ」を持って行く。また「イソモン」を拾いに行くことを「ビナトリに行く」という。それは食用にした小さな貝類はビナと呼ばれたからであった。これらは枕崎からも拾いに来るほど多かったという。

山川町 山川では、魚突きをウンチツと呼び、それにはイザイウンチツ（イザリによる魚突き）とスモグイウンチツ（素潜りによる魚突き）がある。しかし、昭和 30 年頃から瀬魚が少なくなってきたため、後者は廃れた。

宇治群島 鹿児島県の宇治群島では、フノリ採りを各集落に瀬場を割り当て、集落総出で行っていた。しかし、人口の減少、この制度は廃止された。またブト（テングサ）採りも行っていた。塩水湖である長目池でナマコを産した。

三島村 竹島ではカツオ釣りが見られる。またトビウオが産卵に来るためトビウオ漁も見られる。卵を産みに来たメスに、オスが白い精液をかけようとして海が白く濁ったところを網で捕る。硫黄島ではカツオ漁を主とし、ムロアジ漁がこれに次いだ。黒島の大里では昭和初期までカツオ漁が行われた。清流水につけておくと上等の鰹節が製造できた。

トカラ列島 歴史的に見て、トカラは漁業については全く近代化されておらず、ほとんどが島内消費となる自給的な漁業が行われている。唯一の例外が、可耕地が少ない小宝島から農耕地のある宝島へ若干出荷されていることである⁽³²⁾。

トカラの漁業の概況としては、船を使用して行う一本釣り（特にカツオ漁）が中心である。また網によるものは磯建て網があるが、地曳き網などは使用されていない。漁業全般で専門者が少なく畜産などとの兼業が多い。その他 5~6 月にトビウオ漁を行う。

トカラの潜り漁の現況は、素潜りをする人は漸次減少してきており、トカラ列島全体で数名程度である。ポンベを使う人はいない。素潜りの採捕物はほとんど島内消費である。若い後継者が育たず高齢化している。

喜界島 歴史的に見ると、喜界島の上嘉鉄の漁業の最盛期は、大正 6~7 年頃である。その頃、上嘉鉄ではサガマー（トビウオに似た小魚）を獲る組合が 2 号、3 号……と相次いででき、6 号組ができるまでに至った。上嘉鉄はトビウオやサガマーの漁においては、喜界島では断然一位だった。現在では、組合員の中で素潜り漁を行っている人はいないが、一般の人の中には行っている人がいる。潜水器の利用については、漁協で把握している人員は 5 名であり、潜水器使用の国家試験の免許保持者はさらに多くいるという。

沖縄本島とその周辺離島 現在、糸満では素潜りをする人は1名、久高島では素潜りのデントウモグリをする人が1名となっている。

久高島はかつては追込み網漁が中心、現在は近海マグロやイカ釣り、それとモズクの養殖であり、網仕事はしない。それらのうちのモズクの養殖は、消費も多いため沖縄ではかなり盛んになってきている。モズク漁には、売り値の心配がない、また漁協に出荷すれば漁協が販売の始末をつけてくれるというメリットがある。久高島でモズクの養殖をしている家は7戸で、家族で行っている。

一方、戦前の伊是名村について歴史的に見ると、漁業は農閑期利用の副業にしかすぎなかった。釣り漁、追込み網漁、潜り漁のすべてにおいて専門者がいなくて、副次的なものであった。

久米島の漁業の概況は、パヤオ（浮き漁礁）でのマグロ釣り、ソデイカ釣り、モズクの養殖が中心である。他にクルマエビの養殖、刺し網、一本釣りなどがある。久米島での潜り漁の現況としては、素潜りをする人は、年間を通してではなく季節的に行う人も含めると、6~7名ほどである。酸素ボンベを使う人は5~6名いる。エアー・コンプレッサーを使う人はいない。潜り漁をする漁民が減ったのかは、潜り漁では一人一人の水揚げ高が非常に少なくなってきたので、やむを得ずモズクの養殖のような別の漁業体に切り替えたからだという。近年では観光の仕事に携わる人も出てきて、専門の潜り漁をする人はほとんどいなくなった。久米島では最近、宇根・真泊といった旧来の漁村からの漁民の後継者が減って、逆に漁村でない集落から漁業を行う人が出てきている。

多良間島・水納島 現況としては、宮古郡の多良間島・水納島において、漁業は下火となっている。島の周囲は海が荒く、波が高いため大型船を利用している。この島には船大工はいないため、船は宮古から持ってくる。そのため船に関する行事はほとんどない。

潜り漁の現況としては、多良間・水納において、突漁は現在も親しまれている。潜って、魚・タコ・クブシメなどを突いて捕る。また近年、デントウモグリも存在している。突く道具は、マバリ・イグム・ナガブル・クブシメヤリと呼ばれている。

波照間島 八重山地方の波照間島は四囲海に囲まれ、漁業が盛んであるように考えられがちであるが、歴史的には、農業に比べるとその比重は低かった。主な漁業は、イザリ、磯釣り、小型の追込み網、銚突き、曳き縄程度のものだった。しかし、後に糸満漁民によってカツオ漁がもたらされている。

(7) 小括

南西諸島の至るところで、昼間に潜水するタイプからデントウモグリのタイプに変容しつつある。夜間の方が昼間より魚が2~3倍ほどよく獲れるためでもある。つまり潜り漁全体の中でのデントウモグリやボンベの使用の比率はますます増加するという見通しである。一度ボンベを使用することに慣れてしまうと、ボンベ無しで潜水することができなくなるという。しかし素潜りの方が性に合っているという人もなお多い。専業・兼業については、本土では兼業が増えるという予測がたてられるが、一方南西諸島では兼業は増えず、専業化していくプロセスが考えられ

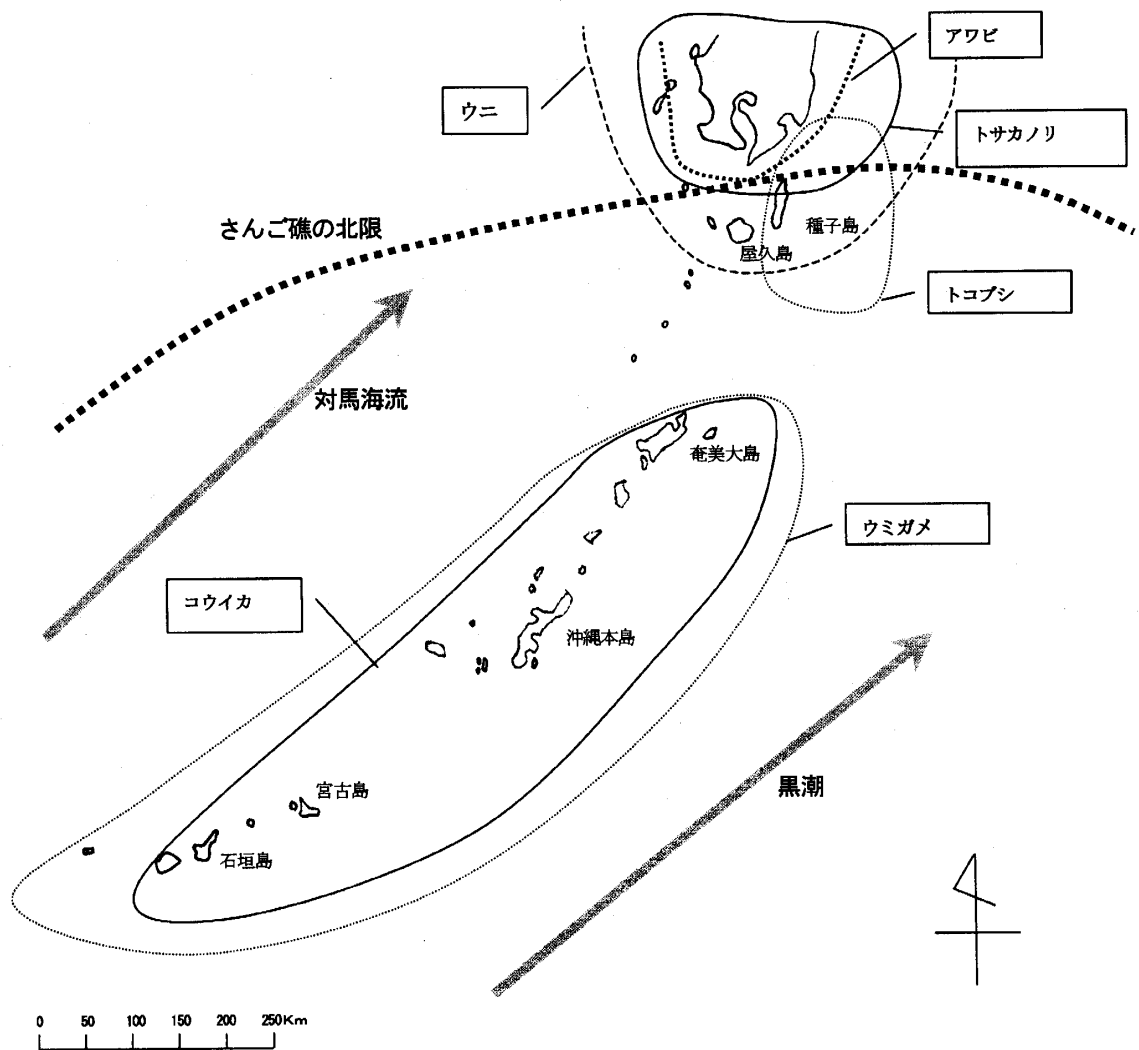


図1 素潜り採捕物の分布範囲

(聞き取り資料により筆者作成)

る。

全体的に素潜りのような体力的にきつく、海水の冷たさが身体にこたえるというような魚は嫌われつつあり、ますます素潜りは減少するという見通しである。しかしサンゴ礁のイノーでは採捕物の種類が多く魅力のある漁撈であるので、今後も存続するものと考えられる。また本土の宮崎県串間市や鹿児島県阿久根市では、デントウモグリをする漁民は現在いない、サンゴ礁のイノーの見られない地域では、もともと魚は釣り・網で獲るものと思っているので、夜型の生活をしても瀬魚を獲るという考え方は全くない。そのためウニやアワビの特産物を採ることを除いては、零細な潜り漁は盛んになり得ない。

おわりに

以上、本論2章にわたり、追込み網漁と潜り漁の現況を地域別に縷々述べてきた。追込み網漁と潜り漁の特徴は以下のように要約できる。

南西諸島および九州南部を追込み網漁と潜り漁の存在形態から分類すると、以下の4類型となる。

I型：潜り漁・追込み網漁ともに残存する地域

奄美南部（古仁屋）与論島 宮古列島 石垣島

II型：追込み網漁は廃れたが潜り漁は残存する地域

種子島 屋久島 徳之島 久米島

III型：潜り漁は廃れたが追込み網漁は残存する地域

伊是名島 甌島

IV型：潜り漁・追込み網漁ともに廃れた地域

奄美北部（名瀬） 沖縄本島（糸満）

1. 潜り漁は対象地域に広く分布するのに対して追込み網漁の分布は局限されている。追込み網漁は、漁業のフロンティアである地域（石垣島・宮古列島・久高島）と、市場とは遠隔にありながら旧慣が残存する地域（奄美大島・伊是名島）とに分けられよう。
2. 潜り漁と追込み網漁は潜水漁業であるが、前者は銚を用いて獲り、後者は網を用いて追込むために潜るのであるから技術的系譜は異なると推定される。技術的には潜り漁の方が難しいが、確実性という面で追込み網漁の方が長けている。潜り漁は専門の海士が行うが、追込み網漁は熟練していない地元の間人が混ざることや村の人が総出で行う集団漁法である。
3. 潜り漁はリーフ内で行われるのに対して、追込み網漁は魚の種類や漁場に合わせた漁法が選択される傾向がある。
4. 潜り漁では付加価値の高い魚が漁獲されるのに対し、追込み網漁での漁獲物は潜り漁に比べると相対的に安いものが多い。これには集団漁のために漁獲物が傷みややすいことも一因である。
5. 追込み網漁は海面の静謐性・リーフの広さ・好漁場の存在などの条件を満たすと操業者が確保できれば残存する可能性が高い。いっぽう、潜り漁は素潜りおよび集団で行う潜りは専門性が高く、技術を継承し得ない地域では廃れやすいが、他の漁法を含む漁業従事者の多い地域では、多少自然条件が悪い場合でも、兼業や余暇利用という形態でなお残存する。

本稿では追込み網漁と潜り漁の実態解明を主眼として検討してきたが、存在形態の残存の要因およびその地域差の説明には十分に論及できなかった。南西諸島および九州南部では海面を生業とする人々が伝統的漁法を結果的に遺存させてきたが、単に文化の継承・継続性という観点からのみでなく、個々の漁業者が自発的意思の表象として伝統的漁法を現在でもなお主体的に選択しているというミクロな経済活動への照射がなされるべきと考えるが、その詳細な検討は他日を期したい。

（付記）論文の作成にあたって、各地の漁協の方々、また漁民の方々にたいへんお世話になりました。慎んで厚くお礼申しあげます。

注

- (1) 佐々木高明『日本文化の基層を探る』, NHK ブックス, 1993, 187~192 頁。
- (2) 大喜多甫文『潜水漁業と資源管理』, 古今書院, 1989。
- (3) 谷川健一編集『海女と海士 (日本民俗文化資料集成 4)』, 三一書房, 1990, 13~44 頁。
- (4) 田辺悟『日本蛮人伝統の研究』, 法政大学出版会, 1990。
- (5) 大喜多甫文, 前掲(2), 114~142 頁。
- (6) 敷網漁業とは, 方形・円形・みの状又は袋状などの網を漁中に敷設し, その上に魚を集めるか, 自然に乗網するのを待って, 魚が逃げないように網を引き揚げて漁獲する漁業をいう。四つ手網・棒受網・多そう張浮網・多そう張底敷網・袋待網・追込み網の 6 種がある。その他の敷網は, サンマ棒受網を除く 5 種の敷網のことを指す。金田禎之『日本漁具・漁法図説』, 成山堂書店, 1979 による。
- (7) 森本孝「海に生きた男たちのロマン」, 『青い海』81 号, 1979 春号, 14 頁。
- (8) ヤトイングワとは前借金と引き換えに子供を雇い入れ, 年季奉公させる慣習である。
- (9) 『宜野座村誌第 3 巻民俗・自然・考古』, 宜野座村誌編集委員会, 1989, 592~597 頁。
- (10) 中楯興編『日本における海洋民の総合研究—糸満系漁民を中心として—下巻』, 九州大学出版会, 1989, 312~313 頁。
- (11) 中楯興編, 前掲(10), 下巻 441 頁。
- (12) 野口武徳「奄美群島における糸満部落の形成」, 『東京都立大学社会人類学研究会報』第 2 号, 1965, 46 頁。
- (13) 沖縄タイムス社『ウミンチュ見聞録』, 2000, 20 頁。
- (14) 下野敏見『日本列島の比較民俗学』, 吉川弘文館, 1994, 250 頁。
- (15) 『伊是名村史下巻—島の民俗と生活』, 伊是名村史編集委員会, 1989, 117~145 頁。
- (16) バダ・クムリともにサンゴの窪みの名称。
- (17) 『村誌たらま島—孤島の民俗と歴史』, 多良間村誌編纂委員会, 1978, 52~55 頁。
- (18) 中楯興編, 前掲(10), 下巻 499 頁。
- (19) 桜田勝徳「男の潜水漁のこと」, 『桜田勝徳著作集 3』, 名著出版, 1980。
- (20) 最上孝敬『原始漁法の民俗』, 岩崎美術社, 1969, 170~194 頁。
- (21) 潜水器には酸素ボンベとフーカー式潜水器 (エアー・コンプレッサー) がある。フーカー式はホースがタンクとつながっている。しかしフーカー式であると, 追込み網漁の時に 4~5 人のホースが絡まって動けないといった危険を招く。追込み網漁もボンベでないといけない。フーカー式はあまり移動しない養殖・棧橋工事・潜り漁に適している。
- (22) 下野敏見「種子島潜水漁法」, 『鹿児島民俗』54 号, 20 頁。
- (23) 古仁屋では潜り漁全般のことをホコ突きと呼ぶ。
- (24) 裾礁は基本的には外洋側に位置するピシ (リーフともいう) と, そのピシの内側に広がる浅い水域であるイノーによって構成される。島袋伸三・渡久地健「イノーの地形と地名」, 『民俗文化』2 号, 近畿大学民俗学研究所, 1990, 243~263 頁。
- (25) トコブシの方言名がナガラメではなく, 両者は別々のものである。トコブシは実が硬く, 岩の穴にいて, 潮が引かないと採れない。昔から磯モンといい, 大潮の時に採る。一方ナガラメは実が柔らかく, 潜って採らなければならない。値段はトコブシの 2 倍で 6000~7000 円である。
- (26) 田辺悟, 前掲(4), 290 頁。
- (27) 下野敏見, 前掲(14), 24 頁。
- (28) 『上屋久町の民俗』, 上屋久町民俗文化財調査報告書, 上屋久町教育委員会, 1987, 長沢和俊の執筆による。
- (29) 柏常秋『沖永良部島民俗誌』, 凌空文庫刊行会, 1954, 75~92 頁。
- (30) 闇夜が良いというのは明るいとエビは自分の影に驚くからであり, また波は少し高いくらいが良いとされる。

- (31) 『知覧町の民俗』, 90～103 頁, 海江田義弘の執筆。
(32) 齊藤毅『漁業地理学の新展開』, 成山堂書店, 1998, 51～75 頁。

参考文献

- 岩田準一『志摩の海女』, アチック・ミュージアム, 1971。
上田不二夫『沖縄の海人 一条満漁民の歴史と生活』, タイムス選書, 1991。
羽原又吉『漂海民』, 岩波新書, 1963。
大橋薫『海女部落の変貌』, 垣内出版, 1994。
瀬川清子『海女』, 古今書院, 1955。
田中幸人・東靖晋『漂民の文化誌』, 葦書房, 1981。
田仲のよ『海女たちの四季』, 新宿書房, 1983。
田仲のよ『磯笛のむらから』, 現代書館, 1985。
谷川健一編集『漂海民一家船と糸満 (日本民俗文化資料集成 3)』, 三一書房, 1992。
田村勇『海の民俗』, 日本の民俗学シリーズ 9, 雄山閣, 1990。
鳥越憲三郎「志摩の海女民俗誌」, 『生活文化史』, 1997, 所収。
野口武徳『漂海民の人類学』, 弘文堂, 1987。
阪野優『海女のいる村』, 中部日本教育文化会, 1980。
安田宗生「南島の漁撈」, 『熊本史学』第 46 号, 1975。
藪内芳彦『漁撈文化人類学の基本的文献資料とその補説的研究』, 風間書房, 1978。
F・マライーニ『海女の島』, 未来社, 1964。

(関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程)